



平成29年10月2日(月)

藤 棚

第342号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>
<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

増大する国家累積債務と受益者負担理念の大切さ

校長 小川義男

日本は、世界一の借金国家である。ネットに、秒刻みの借金表示のシステムがある。現在の我が国の借金総額は1404兆円だそうである。ギリシャ レバノン イタリア ポルトガルより酷いというのだから、悲しくなる。

先日、ある政治家が、「給付型の奨学金」を計画しているのを知った。「校長だから、どんな奨学金にでも賛成するだろう」と思われるかも知れぬが、それは違う。

大学に入学しただけで、返さなくとも良い奨学金を、「まるまる貰える」というのなら、大学に行かなかった人は、どうなる？ 大学どころか、高校にさえ行かず、塗装工事や建設現場で、世の中を支えてくれている、勤労青年はどうなる？

大学へ行けば、「偉くも」なるだろうし、高所得も獲得できる。それならば、卒業後に、感謝して奨学金を返済するのが当たり前だろう。

私も、大学入学当時、二千万円の奨学金を頂いた。今で言えば二万円くらいだろうか。私はこれを、「成績不良」で、二年終了時にカットされた。その後の二年間は、大変であった。しかし今でも、あの、前半二年間の奨学金には、感謝している。

「給付型の奨学金」と言うのはおかしい。仮に総理が、その実質的決定に与ったとしよう。しかし、その金は、当たり前の話だが、総理個人の金ではない。すべて国家の金なのである。

国家というものが、宙に浮いて存在するのではない。国家とは、ひとりひとりの納税者に外ならない。その納税者には、子供のいない人もいる。生涯を独身で通す人もいる。そんな尊い金を奨学金としてお借りする以上、卒業後にそれを返すのは当たり前なのに、給付型奨学金とは、何事か。

何事につけても、「この金は、国が出すべきだ」、そう主張する人が多い。しかしこれは、「俺の経費は他人が払え」という事に外ならないのである。

公立高校の保護者は、月額一万円の授業料を負担するのが、確立された慣習であった。それを、当時の政権は、「すべて只」にしたのである。義務教育ではない高等学校が只というのは、当たり前の話ではない。まあ、「人気取りのためのバラマキ」だったのだろうが、公立だけが、只と

いうのは、もっとおかしい。我々私学人、私学の保護者は、団結して戦い、同様の利益を、私立高校のためにも出させるようにした。

その結果、国は年間 700 億の経費を支出せねばならなくなった。

今、政治家は、消費税を、国の借金返済に充てるのではなく、その相当部分を、育児出産関係に充てようとしている。赤ちゃんも母親も、当面は助かるだろう。

しかし、この莫大な国家累積赤字は、「今助けられた赤ちゃん達」どころか、その孫、曾孫の代まで、引き継がれて行くのである。

国家も家庭も、苦しいながら、収入の範囲で切り回して行かなければならないのは常識だ。

社会福祉ということは本当に大切である。しかし、「自助努力」ということも忘れてはならぬ。昔、社会主義思想は「働かざる者食うべからず」と言った。社会主義世界体制の崩壊は劇的であったが、それにしても、この「働かざる者、食うべからず」は、尊い思想なのではないだろうか。

「社会保障を充実させる」そう主張し続ける事も極めて大切だが、これだけの累積赤字を抱えている以上、それを、これ以上増やさないと、次の世代、次の次の世代に申し送らないことこそ、決定的に重要である。「俺の経費は他人が払え」というエゴイズムと、社会保障が同質ではないことを、今こそ強調しなければならない。

考えて見ればおかしい。私の学生時代、国民保険の掛け金など極めて安かった時代だが、国民健康保険は五割の負担で済んだ。

今、「後期高齢者」は、三割の自己負担となっている。国の政治が悪くなっているように思われてならないのである。

「後期高齢者」なる言葉を用いたのは、小泉元総理だが、その政治的感覚の無神経ぶりには、私も驚いた。今は、小泉氏自身が「末期高齢者」とも言うべき世代に達していようが、あんな無神経、無感覚なタームを用いた頃から、我が国の社会福祉政策は狂ってきているのかも知れない。

口の悪いのが過ぎた。しかし、高校三年生は有権者である。政治的判断力を持たねばならない。二年生、一年生は、有権者予備軍として、国政に対処できる資質を養って行かなくてはならない。

我が国の社会福祉を一層充実させるためにも、「受益者負担」という思想を、一層深めて行かなくてはならないと思うのである。

自学自習の姿勢の確立こそ巨歩を進める捷径

他国に遅れて文明開化を進めた我が国には、書物がほとんどなかった。その結果、口述筆記に近い講義形式が大学に定着したのである。それを、現代まで引きずるのは、単なる保守主義に外ならない。

授業は、極力演習方式、自学自習方式に変化させるべきではないだろうか。狭山ヶ丘が、県のトップに躍り出る道はこれ以外にない。

振り返って、私が一番勉強したのは、明治大学二部(夜間部)に学んだ四年間である。私は、熟読の末、テキストを全部頭に入れ、ノートもテキストも持たず、一番前で聴講した。先生も、「前列」、「目つきの悪い学生」の本質を理解して下さっていた模様である。

自ら学ばねば、積極的に学ばねば、成功などできない。中学、高校受験の生徒諸君にも、是非、この消息を理解して頂きたいのである。